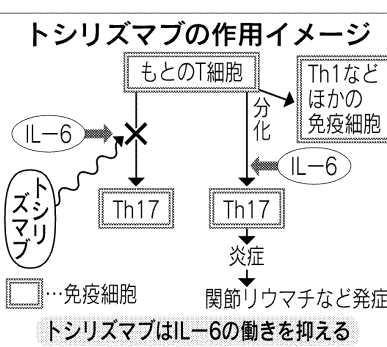


# 炎症性物質の働き抑制

## 阪大や中外製薬



- 「トシリズマブ」で治療が認められている病気と阪大が試した病気
- 現在の主な国内適応疾患
- ・キャスルマン病
  - ・関節リウマチ
  - ・多関節に活動性を有する若年性特発性関節炎
- 阪大が試した主な難病
- ・反応性AAアミロイドーシス
  - ・再発性多発軟骨炎
  - ・強皮症
  - ・反応性関節炎
  - ・強直性脊椎（せきつい）炎
  - ・リウマチ性多発筋痛症

## 皮下注射や薬効持続 使い勝手向上も

いう。新潟県立リウマチセンターや神戸市立医療センター中央市民病院も同様の治療効果を報告している。田中准教授は「予想以上に劇的に効いた。現在、研究班を作って観察研究が進んでおり、さらに証拠を積み重ねたい」と意気込む。

鼻や耳、のど、気道などにある軟骨を免疫機構が攻撃してしまう「再発性多発軟骨炎」でも効果があった。国内では患者が約240人しかいないまれな病気だ。ステロイドや免疫抑制剤でも効果が薄かった患者に、トシリズマブを1年間投与すると炎症が治まり、狭くなった気道も開いたという。

このほか、高齢者で筋肉のこわばりや痛みなどを感じる「リウマチ性多発筋痛症」や「強直性脊椎（せきつい）炎」、皮膚がかちか

ち硬くなる「強皮症」などでも症状が改善した。こうした成果も国の認可手順を踏まないと患者には届かない。中外製薬は親会社のロシュ（スイス）などと共同で、強直性脊椎炎に対するトシリズマブの第3相試験を年内にも始める予定だ。

中外は「この薬は様々な可能性を秘めているが、どの病気で適用拡大するか、優先順位を付けている」と強調する。中外は点滴で投与しているトシリズマブを皮下注射できるようにしたり、薬効の持続期間を4倍に延ばしたりする技術の実用化を進めており、使い勝手の向上も見込む。

免疫反応にかかわる体内物質「インターロイキン6（IL-6）」の働きを抑える抗体（抗IL-6受容体抗体）を関節リウマチ以外の難病に応用する研究が加速している。大阪大学は患者を対象にした臨床研究で有効性を確かめた。この抗体を医薬品として製造販売する中外製薬も薬効を長持ちさせる技術開発などに取り組んでいる。急成長中の薬が大きく「化ける」可能性もある。

IL-6は岸本忠三・阪大教授らが発見した炎症性物質。関節リウマチではIL-6などが関節の炎症や破壊などに深く関係している。

IL-6の働きを抑える抗体を投与すれば症状が改善すると考え、中外製薬と阪大が協力して開発したのが抗体医薬品のトシリズマ

# IL-6抗体 幅広い難病に

ブ（商品名アクテムラ）。売上げ見通しは全世界で2005年にまずキャスルマン病向けに発売、08年には関節リウマチの薬としても認められた。09、10年には欧米でも発売。今年のもあり、IL-6が発症に

▼インターロイキン6（IL-6）

IL-6は岸本忠三・阪大教授らが1986年に発見した炎症性物質。関節リウマチは、炎症や破壊などに深く関係している。IL-6の働きを邪魔する抗体を投与すれば症状が改善すると考え、中外製薬と阪大が協力して開発したのが抗体医薬品のトシリズマブ（商品名アクテムラ）。

関係していれば治療効果も期待できる。阪大の田中敏郎准教授を中心としたチームは、07年からそれぞれの病気の患者にトシリズマブを投与し、効果を確かめる臨床研究を始めた。

現在までに14の病気で試した。代表例が「反応性AAアミロイドーシス」。慢性炎症が原因で、不要なたんぱく質が全身の臓器にたまる。関節リウマチ患者の約5〜10%がこの病気を合併するとされ、進行すると治す手立てがなかった。50歳女性に投与し、3カ月で消化管に沈着した不要たんぱく質がなくなった。

IL-6により不要たんぱく質のもととなる物質が肝臓で作られるが、これをトシリズマブが抑えた結果と

このほか、高齢者で筋肉のこわばりや痛みなどを感じる「リウマチ性多発筋痛症」や「強直性脊椎（せきつい）炎」、皮膚がかちか

ち硬くなる「強皮症」などでも症状が改善した。こうした成果も国の認可手順を踏まないと患者には届かない。中外製薬は親会社のロシュ（スイス）などと共同で、強直性脊椎炎に対するトシリズマブの第3相試験を年内にも始める予定だ。

中外は「この薬は様々な可能性を秘めているが、どの病気で適用拡大するか、優先順位を付けている」と強調する。中外は点滴で投与しているトシリズマブを皮下注射できるようにしたり、薬効の持続期間を4倍に延ばしたりする技術の実用化を進めており、使い勝手の向上も見込む。

阪大は医師主導治験も視野に入れている。日本発の薬を多くの患者へ届ける道筋作りが問われている。

（長谷川章）